

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しないが、以下のように可能な限り外国語によるコミュニケーション力を評価する。
  - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
  - ・併せて、高等学校において、「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔会話〕、〔発表報告〕」「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
  - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる知識や技能についても、引き続き評価する。
- 問題は、高等学校学習指導要領「外国語」の目標及び内容等に対応したものとし、CEFR等を参考に作成する。

また、大学教育を受けるために必要な能力を把握できる問題とするが、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることも考慮し、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるようにする。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

令和8年度の共通テストは、例年同様、高等学校でドイツ語を学んだ受験者の基本的能力を正確に把握することを目標とした。高等学校学習指導要領（外国語編）で示される目標である「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や自分の考えなどを的確に理解したり適切に表現したりして伝え合うコミュニケーション能力を養う等の目標の達成度を多面的に評価すること」を心がけた。

作問に当たっては、高等学校学習指導要領（外国語編）を基準に、高等学校ドイツ語教育関係者の意見を参考にし、過去の共通テスト評価資料の分析も手掛かりにして、問題レベルを適正にするよう心がけた。出題語彙の範囲については、日本独文学会教育部会作成の「基本語彙集」、各種独和辞書の重要語彙、Goethe-Zertifikat B1の語彙リストを参照し、受験者に過度の負担がかからぬように配慮した。並行して全般的に、具体的な場面においてドイツ語を理解し、自ら表現する力を問う問題を出題している。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

設問数と配点については、文法2問11題33点、作文3問6題18点、コミュニケーション7問8題40点、発表5問8題30点、データ読み取り6問7題35点、長文読解6問8題44点とし、全体の設問数は29問、解答数は48題である。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

第1問：基本的な文法知識及び語彙力の習熟度を問う。

第2問：基本的な文法知識に基づく、文の運用能力を問う。

第3問：会話の内容を総体的に捉え、日常会話の基本表現や基本語彙を活用する能力などを問う。

第4問：複数のソースから情報を収集し、それを整理し発表につなげる能力を問う。

第5問：文章や、それに関するデータから必要な情報を選び出す能力を問う。

第6問：比較的分量のある記事を読み、その概要・要点、論理展開、書き手の意見等を把握する

能力を問う。

各問題の設問数と配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問	2問	33点
	第2問	3問	18点
会話・コミュニケーション	第3問	7問	40点
	第4問	5問	30点
読解	第5問	6問	35点
	第6問	6問	44点

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

出題に用いたドイツ語の総語数は、本試験とほぼ同じである。この点について、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）より、「本試験と比較すると、総語彙数は同水準である。昨年度の追・再試験の総語彙数（635語）から大きな変動はなく、基本語彙を中心に出題されていることが伺える」「文章量は同程度である。この傾向は、受験者が既習語彙の範囲内で量のある文章を読む力がより重視される方向に作問されたことを示唆し、文脈把握力・推論力・情報整理力に重点が置かれているという本試験の傾向と一致する」というコメントを頂いた。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは「一昨年度まで第1問にあった発音・アクセントに関する知識を問う出題が本試験同様にない。特定の場面や状況に応じた会話や長文など、本試験と同様に、受験者には今まで以上に幅広く学び、正確な知識が求められる出題である」というコメントを頂いている。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度な負担をできる限り回避するよう配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。

なお、平均点等の情報については、追・再試験は受験者が少ないため、公表していない。それゆえ、本試験との難度の違いや過年度の問題との比較は単純にできないが、問題作成に際しては、問題構成・出題数のみならず、難易度についても本試験と同程度であるように努めた。

設問構成と出題形式については、教科担当教員から「共通テスト『ドイツ語』にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短を身につける意識を持たせるためにも発音に関する出題をしてほしい。本試験と異なり、個人の経験に基づく知識によって問題の理解度に差がつく可能性は少ない。また、第1問は文脈を把握し理解度を測る出題とはなっておらず、実際にはかなり細かな文法と語彙の知識が今回も求められていた。昨年度この場で要望したグラフや表の利用法や種類の選択については、追試験では本文の内容を読み取る助けになっており、適切だと感じた。」というコメントを頂いた。高等学校でドイツ語学習を始めた受験者の学習の成果を適切に測れるような設問構成、出題形式については、今後も検討を続けていきたい。

第1問は主として基礎的な文法、語彙の知識を問う問題である。昨年度に引き続き、新教育課程に対応した問題形式にした。ドイツ語教育部会からは「問われているのはいずれも基本的な知識であり、本試験とのバランスは妥当である」、教科担当教員からは「使用語彙は本試験よりも一見難しそうに見えるが、選択肢の中から選ぶ時に迷う要素が本試験より少ない」との評価を得た。各問を個別の選択

問題ではなく、テキストの中に配置することにより、文法や語彙の知識のみならず、文脈に応じた適切な表現を問う作題形式にしたが、教科担当教員からは、「文法の知識が問われている」との指摘があったことから、今後なお検討を要すると考えている。

第2問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な表現の知識を問うている。昨年度に引き続き、今年度も完答問題を採用せず、部分点を認めている。ドイツ語教育部会によると、「本試験と比較すると、上級者レベルの表現やドイツ語構文の知識が求められ、難度は高くなったといえる」とのコメントを頂いた。なかなか難しいことではあるが、難度を揃えるよう努めたい。

第3問は、昨年度の共通テストと同様、連続性のある会話の解釈を問う形式となっている。Melanieが友人のTinaと会う際に弟Leoを連れて来たことから、ショッピングに行くという当初の予定を変更する前半部分と、湖畔の森へ出かける後半部分とに分かれている。高校生にも馴染みのあるテーマになるよう、同年代の日常的な一場面を取り上げた。ドイツ語教育部会には、状況の想像しやすさを評価していただいた。また本試験と同様にイラストを用いたが、こちらも効果的に利用されているとの評価だった。教科担当教員からは「場面の展開が少ないので読み取りやすい印象を受けた。また図を読み込むことで新たな情報を読み取らなくていいため対話に集中しやすい」との好意的な評価をいただいた。ただし、本試験より解きやすいとの指摘もあり、本試験とのバランスについてより一層考慮することが課題である。

第4問は、昨年度初めて採用されたインタビュー、それに基づくメモとプレゼンテーションという形式を踏襲した。さらに今年度は、本試験・追試験とも、登場人物による発表という具体的な場面設定を問5に盛り込み、会話内容の理解と要約に加え、プレゼン能力を問うという本問題の形式の深化を図った。教科担当教員やドイツ語教育部会の指摘にもあるように、「文化学」という学術研究分野を扱っているため、文中にやや難解で抽象的な用語も頻出し、本試験に比してやや難易度は高かったと言える。他方で本文では、KebabやOstalgieなどの具体例をもとに文化学の解説がなされており、会話の流れを丁寧に読み解けば正答を導き出せるようになっている。また追試験では選択肢に日本語を取り入れ、内容理解を助ける構成とした。生成AIの活用など、時代に即した状況設定も、ドイツ語教育部会から評価を受けた。ただ、プレゼン能力の測定を重視しすぎると、問題の語彙数や分量が増えるおそれもある。出題形式のあり方を含め、今後さらに検討の余地があるだろう。

第5問は本文と二つの統計資料からなる。各段落の内容を正確に理解できるか、グラフを正確に読み取れるか、テキスト全体のテーマは何かを問う問題になっている。いずれも「ドイツの家族の在り方」というテーマで、東西ドイツ分断の時代から2021年までの家族について書かれている。伝統的な大家族や核家族の他にも、パッチワークファミリー、レインボーファミリー、結婚せずに子育てする未婚の母といった話題は最近の欧州の社会的傾向を示すもので、受験者にも馴染みのある内容であると言える。本文は1ページ程度の分量で、雑誌の記事をもとに簡略化された説明文として読める。資料1は欧州における未婚の出産率を2021年と1998年で比較した統計資料、資料2は2021年のドイツにおける未婚の出産率を示した統計資料である。提示された資料を読み取り未婚の出生率の変化を考えさせるこのような出題形式は、新しい出題傾向を踏襲している。問題に対する教科担当教員からの評価として、「『ヨーロッパの家族形態の今昔』という話題であるが、日本でも最近少子化や婚姻数の減少など取り上げられるテーマなので想像しやすい」、「二つの資料は本文を視覚したものであり、本文理解の一助となる」との指摘があった。ドイツ語教育部会からは、語数が多い旨指摘があった。問題の素材の性質上語数が多くなってしまったが、語数は適切に多くなりすぎないように今後注意していくところである。また、「複雑な構文は見られず、丁寧に読み進めれば十分に内容が読み取れる問題」

との指摘もあった。統計資料を読み取ることが求められる問題が問2や問3、テキスト全体の主旨を理解したうえで解答する問題は、問4や問5である。

第6問では、それぞれの段落の記述内容を正確に読み取れるか、また各段落で記述されている内容から全体の内容を有機的に理解できるかを問う問題を作成した。6問のうち4問は選択肢をドイツ語にしており、本文を正確に読み取りつつ、その意味と内容をドイツ語できちんと考え、まとめなおすことができるかを問うている。テキストには、「世代」に関するステレオタイプおよび、新しい学術的取り組みについて論じたものを選んだ。メディアなどで世代間の対立が取り沙汰されることが多いが、学術的な調査の結果を参照すると、各世代のイメージが必ずしも当たらず、そのほかの様々な要素を考慮することが重要であるという内容となっている。ドイツ語の文章の肝を押さえ、論理的な展開を着実に追えるか否かが、正答と誤答の分かれ目になったのではなかろうか。教科担当教員およびドイツ語教育部会からの評価としては、「比較的長い」「やや抽象度が高い」問題でありながら、世代間対立というテーマは「日本でも頻繁に取り上げられており」、受験者にとって比較的取り組みやすい内容だったのではないかという趣旨で、大体共通していた。問に対しては、問1～問6それぞれの出題形式は違えども、本文の対応箇所、参照箇所が比較的明確で、概ね、注意深く考えれば正答にたどり着くことができるという評価であった。また、本試験との問題形式、難易度の比較という観点から若干のコメントも有った。本試験と問題形式をすべて同じにする必要はないが、難易度や解きやすさの点で、引き続き足並みを揃えていくことは重要と感じた。

#### 4 まとめ

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、ドイツ語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっていることに鑑み、問題作成分科会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、更に良問の作成に向けて努力を続けていく所存である。